

# 日本語学習者のロールプレイにおけるフィラー使用の発達

——依頼・断り場面の縦断コーパス分析と母語話者比較——

呉 楚琦 (wuchuqi.research@gmail.com)

一橋大学大学院生 / 国立国語研究所 共同研究員

## 要旨

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者がロールプレイ（依頼・断り）においてフィラーをどのように使用しているのか、またその使用が大学4年間でいかに発達するのかを、縦断学習者コーパス（B-JAS）を用いた量的分析によって明らかにすることを目的とする。さらに、日本語母語話者との比較を通じて、日本語学習者のフィラー使用の発達的特徴を検討する。分析の結果、第一に、日本語学習者のフィラー使用頻度は両場面において学年の上昇とともに全体的な減少傾向を示したが、その変化のパターンには場面ごとの違いが見られた。中でも「断り」場面においては、より急峻な減少が確認され、4年次には「依頼」場面における使用頻度が日本語母語話者の水準に近づいた一方で、「断り」場面では依然として有意な差異が確認された。第二に、使用されるフィラーの形式においては、学習初期には単純な母音型が多く用いられていたが、学年の上昇とともに「あの」や「えっと」など、より日本語母語話者に特徴的な形式へと推移する傾向が観察された。この形式的変化は、日本語学習者の使用傾向が部分的に日本語母語話者に接近していることを示している。以上の結果から、日本語学習者のフィラー使用の発達は、単に日本語母語話者の使用に接近する過程としてではなく、場面の認知的・語用論的負荷に応じて、日本語学習者自身が言語運用のストラテジーを構築していく動的なプロセスとして捉えることが適切であると示唆される<sup>1</sup>。

**キーワード：**フィラー、縦断研究、日本語学習者、ロールプレイ、場面間比較

## 1. はじめに

第二言語習得研究において、学習者の言語能力が時間の経過とともにどのように変化・発達していくのかを捉えることは、重要な研究課題の一つである。本稿が対象とする日本語学習者のフィラーの使用もまた、こうした発達過程において顕著な変化を示す言語現象の一つである。次に示す発話例は、「北京日本語学習者縦断コーパス」（B-JAS）に収録された中国語を母語とする日本語学習者（K）が、アルバイトの勤務日数を減らして欲しいという依頼を日本人店長（C）に伝えるロールプレイ場面における、1年次および4年次の発話冒頭部分である。

---

<sup>1</sup> 本稿は、中国語話者のための日本語教育研究会第56回研究会（2024年9月21日於中国広東省広州市・中山大学外国語学院）の口頭発表での発表内容をもとに作成したものである。また、本研究は、国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「多様な言語資源に基づく日本語非母語話者の言語運用の応用的研究」の成果の一部である。

(1) 【1年次】

K: {笑}, あー, あー, わた, 私は, んー, い, 今までー, 色々な, えーし仕事をーし, 仕事を, したーる, した, んー, あーさ, んーさ, 最近の仕事は, ちっとー, えー一週三回, でっす, んー, 今ー, ちよっとー, あー, んー, かな悲しいと思います, あー, んー, だから, あー, 仕事, しご, 仕事でー, いし, 一週, 二回, に, えー二回に, 二回に, なります, んえー, なりましてもいいですか, うん

C: ん, いあの一, 今し, んーどうしたんですかー, し, い, 忙しいってこと?

(CCB004-RP1-01-01)

(2) 【4年次】

K: あ, 店長ちょっと〈うん〉あの一, お願いしたいことなんですけども, 〈はい〉あの一, い, 今まではー, 週に三回, う, あの一週に, あの一, あの一, 三日の, 仕事, なんですけれども, 最近結構, あの一, 学校のほうが…

C: ふんふん

K: でー, これからは, 週に, 二日の一仕事ーに, 変えていただいてもよろしいでしょうか

(CCB004-RP1-04-07)

1年次の発話例(1)では、「あー」「んー」といった単純な母音と同形のフィラーが多用され、発話全体が非流暢な印象を与えるのに対し、4年次の発話例(2)では、それらの使用が大幅に減少し、「あの一」のように談話の展開を意識したフィラーが用いられるようになるとともに、発話の構造もより複雑になっている。このように、同一の日本語学習者においても、フィラーの使用は4年間で顕著な変化を遂げていることが確認できる。このような変化は、フィラーの「量」および「質」の両面において、時間の経過とともにどのような発達的変容が生じるのか、さらにそれをもたらす要因には何があるかを縦断データに基づく分析が必要である。

本研究では、日本語学習者におけるフィラー使用の発達過程を捉えるため、まず使用頻度と形式という量的側面から分析を行う。これは、言語の習得や使用の変化において、言語項目の使用頻度が極めて重要な役割を果たすというコーパス言語学における基本的な考えに基づくものである(Gries & Divjak 2012)。具体的には、まず、日本語学習者が何を、どれくらい使用しているのかという量的な実態を把握し、その上でより詳細な質的分析へと展開することで、発達過程を実証的に明らかにすることを目指している。次章でも述べるように、これまでも日本語学習者のフィラー使用に関する先行研究は数多く存在するが、その多くは横断的なものである。縦断的な研究も存在するものの(石黒 2022, 呉 2024 など), 「依頼」と「断り」といった負荷の高い対話タスクに焦点を当て、4年間という長期間にわたるフィラー使用の発達過程を分析した研究は管見の限りない。

以上の背景および問題意識を踏まえ、本研究では、ロールプレイトask(依頼・断り)において、中国語を母語とする日本語学習者が大学4年間で示すフィラー使用の発達的変化を、日本語

母語話者の使用傾向と比較しながら分析することを目的とする。この目的を達成するため、以下の2つのリサーチクエスチョンを設定する。

RQ1：依頼および断り場面において、日本語学習者のフィラーの使用頻度は、4年間の学習過程においてどのように変化するか。

RQ2：その発達過程において、日本語学習者が使用するフィラーの形式はどのように変化し、構成や多様性にどのような傾向が見られるか。

なお、本稿の分析においては、依頼・断りという二つの場面間の比較に加え、日本語母語話者のデータとの比較も取り入れ、多角的な視点から検討を行う。

## 2. 先行研究

音声コミュニケーションにおいて、フィラーは単なる言いよどみに止まらず、多様な機能を担う重要な言語要素として位置付けられている。近年の日本語教育研究においても、日本語学習者が「母語話者らしい」自然な非流暢性をどのように捉え、それを言語運用にどう取り入れようとしているのかという、学習者視点に着目した研究が現れつつある（佐藤 2025）。こうした背景を受けて、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」（I-JAS）のような大規模学習者コーパスを活用した横断的研究が進展しており、日本語学習者によるフィラー使用の実態を客観的に捉える試みが蓄積されてきた。例えば、小西（2018）は、日本語習熟度の上昇に伴い、フィラーの使用形式が単純な「母音型」から、より語彙的なものへと推移する傾向を報告している。また、日本語学習者の母語がフィラー形式の選択に影響を与えることも指摘されている（萩原・池谷 2023）。

これらの横断研究は、日本語習熟度や日本語学習者の母語背景といった要因とフィラー使用との関係を明らかにする上で大きな貢献を果たしているものの、同一の日本語学習者が時間の経過とともにフィラー使用をどのように変化させていくのかという、「発達過程」そのものを直接に捉えることには限界がある。

フィラー使用の発達過程を明らかにするためには、同一の日本語学習者を長期にわたって追跡する縦断的アプローチが不可欠である。しかし、縦断コーパスの構築では多大な時間的・人的コストが伴うため、その実現は容易ではなく（Meunier 2015:381）、日本語学習者のフィラー使用に関する縦断的研究はいまだに稀である。そのような数少ない先行研究の一つとして、石黒（2022）は「北京日本語学習者縦断コーパス」（以下、B-JAS）の対話タスクを用い、中国語を母語とする日本語学習者が学習初期には母語のフィラーを多用しながらも、学習経験の蓄積および留学経験を経て、日本語のフィラーを徐々に習得し、その使用が安定していく過程を報告している。また、呉（2024）は同じく B-JAS のストーリーテリングデータを用い、独話タスクにおけるフィラーの使用頻度・形式・位置の変化を4年間にわたり追跡し、その発達の変容を明らかにしている。さらに、Chen（2025）は、B-JAS を用いて「アノ」「ソノ」「エート」「マー」といった特定のフィラーに着目し、それらの使用と日本語習熟度との相関関係を分析している。

これらの縦断研究により、日本語学習者による自然対話や独話におけるフィラー使用の発達的変容については、一定の知見が蓄積されつつある。しかし、日本語学習者が実際に直面するコミ

コミュニケーション場面は、こうした状況にとどまらない。特に「依頼」や「断り」といった対人関係上の配慮や心理的負荷の大きい場面においては、フィラーの使用実態が異なる可能性が高いと考えられる。これらの場面は語用論的能力を評価する上でも重要なタスクとして多くの研究で取り上げられてきたが、その多くはポライトネス・ストラテジーや定型表現の分析に焦点を当てており（真鍋 2013, 趙 2024）、発話のプランニングや話者の心理状態に深く関与するフィラーのような周辺的な言語要素の発達の側面については、十分な検討がなされていない。

そこで、本研究では、先行研究の知見を踏まえながら、縦断的に収集された日本語学習者の発話データを用い、「依頼」と「断り」場面におけるフィラー使用が、4年間でどのように変化・発達するのかを、頻度と形式の2側面から明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究方法

#### 3.1 分析対象コーパス

本研究で使用するコーパスは、「北京日本語学習者縦断コーパス」(B-JAS)に収録された中国語を母語とする日本語学習者17名である。また、日本語学習者との比較のため、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(以下、I-JAS)に収録された日本語母語話者50名を分析対象に含めた。

B-JASは、中国語を母語とする大学生が日本語学習を始めた初期段階から4年間にわたる習得過程を追跡することを目的に構築された縦断コーパスである。対話、ロールプレイ、ストーリーテリングなど、複数のタスクに基づく音声及びその文字化データが収録されており、日本語学習者の言語発達過程を多角的に分析することが可能である。一方、I-JASは、12の異なる言語を母語とする日本語学習者を対象とした大規模な横断コーパスであり、比較対象として日本語母語話者50名のデータも併せて収録されている点に大きな特徴がある。本研究では、I-JASにおける日本語母語話者のデータを、日本語学習者の発達の変化を検討するための比較群として用いる。

B-JASとI-JASは、ともにロールプレイタスクが実施されている点において比較可能である。本研究では、両コーパスで共通して実施された2つの場面、すなわち「依頼(アルバイトの日数を減らしてほしいと店長に依頼する)」および「断り(接客から調理への担当変更を店長に頼まれるが断る)」<sup>2</sup>の場面に限定した。なお、B-JASにおいては、I-JASと同一のテーマが実施された奇数回(第1・3・5・7回)の調査データのみを分析対象としている。

また、本研究では、フィラー使用の発達過程を、教育現場との接続を考慮しつつ、「学年」という指標を用いて分析を行った。「学年」がB-JASにおける日本語学習者の日本語習熟度の発達を反応する適切な指標であることは、SPOT(Simple Performance-Oriented Test)スコア(表1)に基づく反復測定一元配置分散分析の結果からも支持されている( $F(3,48) = 117.08, p < .001, \eta^2 = .588$ )。さらに、多重比較の結果より、1年次から4年次にかけて、全ての学年間でスコアが有意に上昇していることも確認された( $p < .05$ )。

---

<sup>2</sup> 迫田他(2016)「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」(<https://repository.ninjal.ac.jp/records/846>)を参照されたい。

表 1 B-JAS の調査時期と SPOT 得点の平均

学年	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次	
調査回	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回	第 8 回
時期	1 月	5 月	10 月	4 月	9 月	4 月	10 月	4 月
SPOT の平均	60.0		71.5		75.2		80.9	

加えて、本研究が追跡する学年ごとの発達過程において、出発点である 1 年次の参加者における SPOT 平均スコアが 60.0 点であった。これは、本研究の分析対象となる日本語学習者がいわゆる「ゼロ初級」段階からではなく、すでに一定の日本語能力を備えた中級レベル相当 (李他 2015) の段階から調査が開始されることを示している。したがって、次節の結果に対する考察を行う際には、このことを前提として考察を進めたい。

### 3.2 フィラーの抽出と分類基準

本研究では、山根 (2002:49) による「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にない、発話の一部分を埋める音声現象」とする定義に準拠する。この定義に基づき、分析対象とするフィラー形式を表 2 に示す 10 種類に分類し、形式ごとの使用実態を詳細に検討する。

表 2 フィラーの種類及び出現形式

種類	含まれる形式	種類	含まれる形式
母音型	「あ」「い」「う」「え」「お」など	ナンカ型	「なんか」など
エート型	「えーと」「えっと」など	ネー型	「ね」「いや」など
コーソー型	「こう」「そう」など	ハイ型	「はい」「うん」など
コソア型	「この」「その」「あの」など	マー型	「まあ」「ま」など
ンー型	「ん」「んと」など	モー型	「もう」など

具体的な抽出手順としては、まず B-JAS の配布サイトから音声データおよびテキストデータをダウンロードし、筆者自身が全ての音声データを聴取しながら、テキストデータにおけるフィラーを抽出・集計する方法を採用した。なお、抽出に際しては、フィラーと類似する他の音声現象との識別に十分留意した。特に、語の一部を繰り返す単なる言いよどみ (例えば「あ、あ、あした」) については、山根 (2002) の定義に照らして、本研究の分析対象から除外した。また、フィラーの集計および分析にあたっては、濁音の有無や特殊拍 (促音・長音・撥音など) による表記上の揺れを区別せず、同一形式として取り扱った。

### 3.3 分析手順

本研究では、以下の手順に従って統計的分析を行った。

まず、各学年・各場面における総語数が異なるため、フィルターの使用数をそのまま比較することは適切ではない。そこで、フィルターの使用数を総語数で割り、1万語あたりの使用数に計算することで、使用頻度の正規化を行った。

次に、1万語あたりの使用頻度を従属変数とし、学年と場面がフィルター使用に及ぼす影響、ならびに両者の交互作用を検証するため、線型混合効果モデル (Linear Mixed-Effects Model : LMM) による分析を行った。モデルには、学年 (1~4年次) および場面 (依頼・断り) を固定効果、話者 (17名) をランダム効果として設定し、学習者間の個人差を考慮した上での効果推定を可能にした。さらに、LMMにおいて交互作用が統計的に有意と判定された場合には、Tukey法による多重比較を実施し、下位効果の詳細な検討を行った。

さらに、4年次学習者と日本語母語話者のフィルター使用傾向を比較するために、話者群 (日本語学習者・日本語母語話者) を被験者間要因、場面 (依頼・断り) を被験者内要因とする二元配置分散分析 (Two-way ANOVA) を実施した。この分析により、話者群および場面がフィルターの使用頻度に与える効果、ならびに両者の交互作用の有無を検証した。

## 4. 結果の分析

### 4.1 フィルター使用頻度の縦断的变化と場面比較

本節では、日本語学習者のフィルター全体の使用頻度 (1万語あたり) について、学年の上がり (1~4年次) と依頼・断り場面による変化を分析・考察する。以下の表3に、学年および場面別の日本語学習者のフィルターの使用頻度の記述統計量 (平均および標準偏差) を示す。

表3 学年・場面別のフィルター使用頻度 (1万語あたり) の記述統計量

依頼			断り		
学年	平均(Mean)	標準偏差(SD)	学年	平均(Mean)	標準偏差(SD)
1	1373.8	648.4	1	2517.5	1148.6
2	1184.3	368.0	2	2048.7	715.5
3	990.9	367.9	3	1475.4	510.3
4	620.6	286.8	4	971.1	306.7

表3を見ると、学年が上がるとともに、依頼・断りの両場面においてフィルターの平均使用頻度が減少する傾向が確認される。依頼場面では、1年次の平均使用頻度が1373.8であるのに対し、2年次は1184.3、3年次は990.9、4年次には620.6まで低下している。断り場面でも同様に、1年次の2517.5をスタートとして、2年次2048.7、3年次1475.4、4年次971.1と、段階的な減少が見られた。このように、フィルターの使用頻度は学年間で一貫して減少傾向を示しており、その変化は特に3年次から4年次にかけて顕著である。

また、標準偏差に着目すると、いずれの場面でも1年次における分散が最も大きく、学年の上がりに伴ってその値が縮小する傾向が確認できた。例えば、依頼場面では1年次の標準偏差が648.4であるのに対し、4年次では286.8まで低下している。同様に、断り場面においても1年次では1148.6と非常に大きなばらつきがあるが、4年次には306.7まで縮小している。これは、日本語学習の初期段階にはフィラー使用における個人差が大きいものの、日本語学習が進むにつれて話者間のばらつきが収束していく可能性を示唆している。

さらに、場面間の比較では、全ての学年において、断り場面のフィラーの使用頻度が依頼場面を上回っている。その差は1年次で特に顕著であり（依頼：1373.8 vs 断り：2517.5）、4年次においても依頼場面（620.6）に比べて断り場面（971.1）の方が高い使用頻度が維持されている。

以上まとめられた日本語学習者の使用傾向の統計的信頼性を検証するために、フィラーの使用頻度を従属変数とし、学年（1~4年次）、場面（依頼・断り）を固定効果に、話者（17名）をランダム効果とする線形混合効果モデル（Linear Mixed Model 以下,LMM）を構築し分析を行った。モデル式は「frequency ~ year \* task + (1 | id)」である。このモデルにおいて、frequency は従属変数として1万語あたりのフィラーの使用頻度を示す指標であり、固定効果として学年(year: 1~4年)と場面(task: 依頼・断り)およびその交互作用を指定している。ランダム効果(1 | id)は、各日本語学習者のフィラーの使用傾向を切片としてモデル化することによって個人差を考慮するためのものである。分析の結果を表4に、また予測値に基づく学年と場面の交互作用を図1に示す。

表4 フィラーの使用頻度に対するLMM分析の結果

	推定値 (Estimate)	標準誤差 (SE)	自由度 (df)	t 値	p 値	95%信頼区間
切片 (Intercept)	1373.78	147.51	97.96	9.313	< .001 ***	[1081.86, 1665.69]
学年 [2年]	-189.48	185.5	112	-1.02	0.309	[-556.58, 177.61]
学年 [3年]	-382.87	185.5	112	-2.06	.041 *	[-749.97, -15.78]
学年 [4年]	-753.14	185.5	112	-4.06	< .001 ***	[-1120.24, -386.05]
場面 [断り]	1143.69	185.5	112	6.166	< .001 ***	[776.60, 1510.78]
学年[2年]×場面[断り]	-279.26	262.33	112	-1.07	0.289	[-798.41, 239.89]
学年[3年]×場面[断り]	-659.15	262.33	112	-2.51	.013 *	[-1178.30, -140.00]
学年[4年]×場面[断り]	-793.28	262.33	112	-3.02	.003 **	[-1312.42, -274.13]

P < 0.001 “\*\*\*” 0.01 “\*\*” 0.05 “\*”

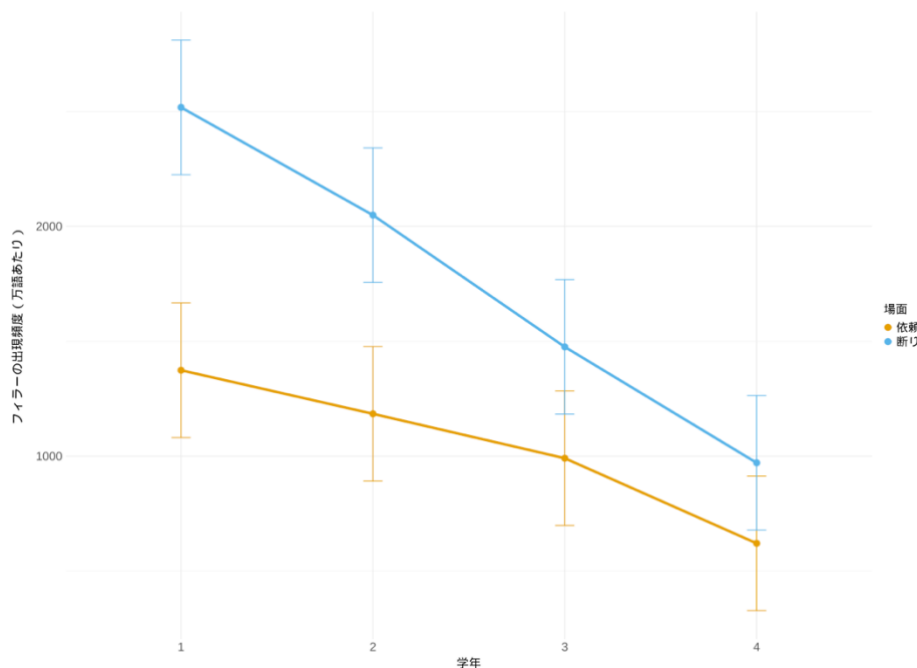


図1 フィラー使用頻度における学年と場面の交互作用

LMMの結果(表4)によると、まず、学年の主効果が統計的に有意であった( $F(3,112)=28.57, p<.001$ )。基準レベルである「1年次・依頼場面」と比べて、3年次(Estimate = -382.87,  $p<.005$ )および4年次(Estimate = -753.14,  $p<.001$ )においてフィルラーの使用頻度の有意な減少が認められ、学年が上がるに伴うフィルラーの全体的な減少傾向が有意に示された。次に、場面の主効果も有意であり( $F(1,112)=58.73, p<.001$ )、基準レベルである依頼場面に対して、断り場面ではフィルラーの使用頻度が有意に高い(Estimate = 1143.69,  $p<.001$ )ことが示された。このような場面の差は図1からも確認でき、全ての学年において断り場面の折れ線が依頼場面の折れ線を上回って推移をしている。

次に、学年と場面の交互作用も統計的に有意であった( $F(3, 112)=3.80, p<.05$ )。具体的には、「3年次・断り場面」(Estimate = -659.15,  $p<.05$ )および「4年次・断り場面」(Estimate = -793.28,  $p=.003$ )の交互作用が有意な値を示している。これは、図1で示されるように、学年が上がるに伴うフィルラーの使用頻度の減少が、依頼場面と比べて断り場面でもより急激であることを統計的に明らかにしたものである。つまり、日本語学習者は特に困難度が高いと考えられる断り場面において、日本語学習の初期段階においてフィルラーを非常に高い頻度で使用していたが、高学年に向けてその使用をより効果的に減少していく過程にある可能性が示唆される。

さらに、学年と場面の交互作用の具体的な様相を詳しく検討するため、Tukey法による多重比較を行った結果を表5に示す。



表5 Tukey法による多重比較の結果（有意差のあるペアのみ）

比較ペア	差 (Estimate)	SE	df	t 値	p 値
1年 依頼 - 4年 依頼	753.1	185	112	4.06	.0023 **
1年 依頼 - 1年 断り	-1143.7	185	112	-6.166	<.0001 ***
1年 依頼 - 2年 断り	-674.9	185	112	-3.639	.0096 **
2年 依頼 - 1年 断り	-1333.2	185	112	-7.187	<.0001 ***
2年 依頼 - 2年 断り	-864.4	185	112	-4.66	.0002 ***
3年 依頼 - 1年 断り	-1526.6	185	112	-8.23	<.0001 ***
3年 依頼 - 2年 断り	-1057.8	185	112	-5.703	<.0001 ***
4年 依頼 - 1年 断り	-1896.8	185	112	-10.226	<.0001 ***
4年 依頼 - 2年 断り	-1428.1	185	112	-7.699	<.0001 ***
断り 1年 - 断り 3年	1042	185	112	5.617	<.0001 ***
断り 1年 - 断り 4年	1546.4	185	112	8.337	<.0001 ***
断り 2年 - 断り 3年	573.3	185	112	3.09	.0498 *
断り 2年 - 断り 4年	1077.7	185	112	5.81	<.0001 ***

表5からは、依頼場面において、1年次と4年次との間で有意な差 ( $p < .005$ ) が確認された。一方で、断り場面では1年次と3年次 ( $p < .0001$ )、1年次と4年次 ( $p < .0001$ )、2年次と3年次 ( $p < .005$ )、2年次と4年次 ( $p < .0001$ ) の間でそれぞれ有意な差が見られ、断り場面における学年間の使用頻度の差がより広く認められることが分かる。また、学年と異なる場面の組み合わせでは、「1年次・依頼場面」と「1年次・断り場面」 ( $p < .0001$ )、「2年次・依頼場面」と「2年次・断り場面」 ( $p < .001$ ) など、多数のペアで有意な差が確認された。これらの結果は、日本語学習者のフィルターの使用頻度面での発達が、学習時間だけではなく、遂行するタスク場面の性質によっても複雑な影響を受けていることを示している。

#### 4.2 日本語母語話者との比較分析

前節では、日本語学習者のフィルター使用頻度が学年および場面によって変化することを明らかにした。本節では、特に4年次の日本語学習者に着目し、その使用傾向を日本語母語話者と比較することで、日本語学習者のフィルター発達の到達点と、そこに残る日本語母語話者との差異を分析する。下の表6には、日本語学習者および日本語母語話者の各場面におけるフィルター使用頻度の記述統計量を、図2には両者の使用傾向の関係性を示している。

表 6 話者・場面別のフィラー使用頻度 (1 万語あたり) の記述統計量

依頼			断り		
学年	平均	標準偏差	学年	平均	標準偏差
1	1373.8	648.4	1	2517.5	1148.6
2	1184.3	368.0	2	2048.7	715.5
3	990.9	367.9	3	1475.4	510.3
4	620.6	286.8	4	971.1	306.7
母語話者	581.3	309.7	母語話者	553.7	256.8

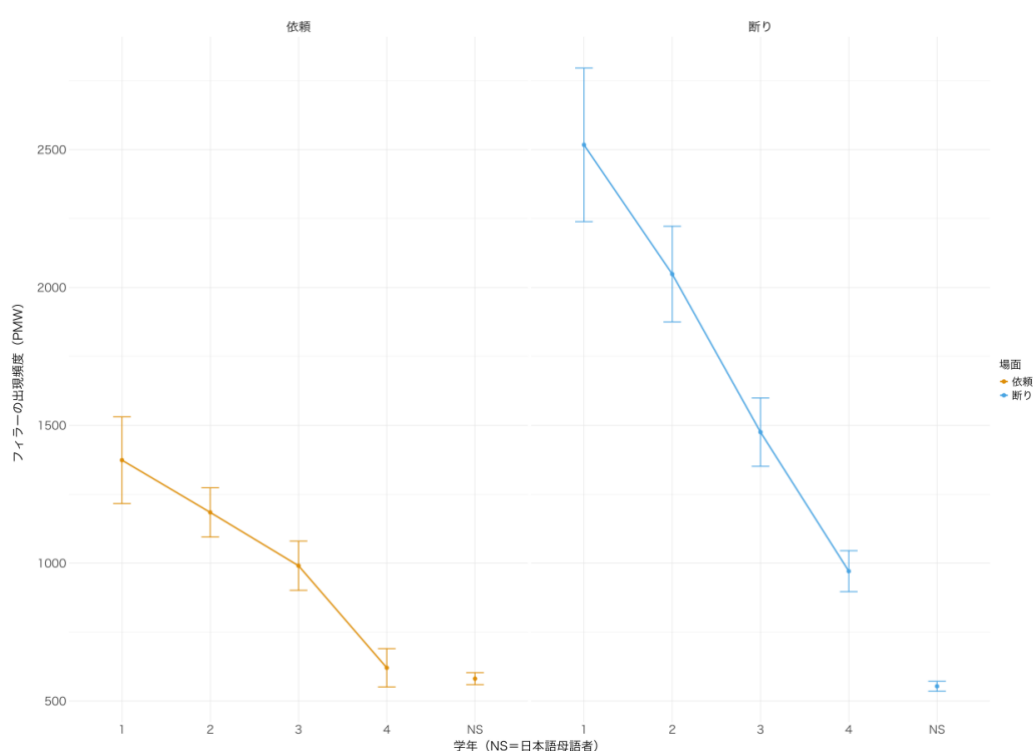


図 2 日本語学習者と日本語母語話者におけるフィラーの平均使用頻度の推移

4 年次日本語学習者と日本語母語話者におけるフィラーの使用頻度 (対数変換済み) を比較するため、話者群 (日本語学習者・日本語母語話者) を被験者間要因、場面 (依頼・断り) を被験者内要因とする二元配置分散分析を実施した。

その結果、まず、話者群の主効果が統計的に有意であることが示された ( $F(1, 65) = 5.70, p < .05, \eta^2 = .070$ )。また、場面の主効果も同様に有意であった ( $F(1, 65) = 26.23, p < .001, \eta^2 = .029$ )。さらに、話者群と場面の交互作用も統計的に有意であることが確認された ( $F(1, 65) = 26.89, p < .001, \eta^2 = .029$ )。これらの結果は、フィラー使用に対する場面の影響が、日本語学習者と日本語母語話者の間で質的に異なる可能性を示唆している。

そこで、交互作用の具体的な内容を明らかにするために単純主効果の検定を行った結果、以下の4点が確認された。第一に、依頼場面においては、4年次日本語学習者と日本語母語話者との間に有意な差は見られなかった ( $p = .462$ )。第二に、断り場面では、日本語学習者のフィラー使用頻度が日本語母語話者よりも有意に高く ( $p < .001$ )、効果量 ( $\eta^2 = 0.21$ ) も大きいことが示された<sup>3</sup>。第三に、日本語学習者群内に限定すると、依頼場面よりも断り場面で有意に多くのフィラーが使用されており ( $p < .001$ )、この傾向は4.1節で示された結果と一致するものであり、効果量も大きいことが ( $\eta^2 = 0.27$ ) 確認された。最後に、日本語母語話者群内では、場面によるフィラー使用頻度に有意な差は確認されなかった ( $p = .949$ )。

以上の比較分析により、日本語学習者のフィラー使用頻度は、学習年次の上昇に伴って全体としては減少する傾向が見られるものの、その発達の様相は、単純に日本語母語話者に近づいていく過程として一元的に捉えることはではないことが分かった。具体的には、比較的心理的負荷の低い「依頼」場面においては、日本語学習者は日本語母語話者と同程度の使用頻度に達している一方で、認知的・心理的負荷の高い「断り」場面では、依然としてフィラーを多用するという日本語学習者特有の傾向が、4年間の学習を経た最終段階においても保持されていた。このような非対称的な発達パターンは、フィラーが単なる日本語の習熟度に関わるものではなく、日本語学習者が高負荷なコミュニケーションタスクを直面した際に用いる語用論的ストラテジー、あるいは認知的負荷の反映として機能している可能性を示唆している。この点については、今後、フィラーの機能や共起環境の分析を通じて、さらなる検討が必要である。

### 4.3 フィラー使用形式の縦断的变化

前節では、日本語学習者によるロールプレイにおけるフィラーの全体的な使用頻度が、4年間の学習過程を通じて減少傾向を示すこと、そしてその減少傾向が、依頼と断りという日本語学習者にとって言語処理負荷の異なる場面間で、異なる様相を示していることを明らかにした。また、日本語母語話者との比較からは、依頼場面においては4年次に日本語母語話者の使用水準に近づく一方で、断り場面では依然として有意な差異が残されている。本節では、こうした頻度面での変化をより詳しく把握するため、日本語学習者および日本語母語話者が用いたフィラーの形式に焦点を当て、具体的な使用傾向を検討する。

#### 4.3.1 全フィラー形式の分布と使用の多様性

全てのフィラー形式について、日本語学習者の学年別及び場面別の使用頻度（1万語あたり）をまとめた結果と、日本語母語話者の場面別の各フィラー形式の使用頻度を表7に示す。

---

<sup>3</sup> 効果量の大きさの目安は、水本篤・竹内理（2011：51）「効果量と検定力分析入門：統計的検定を正しく使うために」2010年度部会報告論集『より良い外国語教育のための方法』を参照されたい。

表7 各フィルター形式の学年・場面別の使用頻度 (1万語あたり)

形式	依頼					断り				
	1年次	2年次	3年次	4年次	母語話者	1年次	2年次	3年次	4年次	母語話者
あ	775.8	484.5	357.1	129.7	134.0	1323.2	680.2	396.4	173.9	140.7
あの	27.2	209.3	211.5	109.8	199.7	89.9	334.0	241.3	200.4	150.8
う	83.0	97.1	125.4	50.3	0.9	187.6	162.9	226.2	41.3	5.5
んと	2.7	2.2	1.3	9.2	4.6	7.7	6.1	2.2	14.7	0.9
うん	77.6	116.5	30.4	29.0	8.3	146.5	281.1	81.9	76.6	17.4
え	50.4	83.1	54.5	38.1	62.9	136.2	203.7	153.0	53.1	49.4
えっと	12.3	99.3	62.1	117.5	66.6	38.5	246.4	116.3	109.1	25.6
お	17.7	18.3	7.6	-	0.9	33.4	26.5	4.3	5.9	0.9
その	2.7	42.1	84.9	41.2	17.6	7.7	83.5	153.0	70.7	22.9
はい	-	2.2	12.7	10.7	36.1	2.6	8.2	28.0	17.7	12.8
まあ	5.4	2.2	17.7	27.5	85.0	2.6	6.1	30.2	35.4	51.2
ん	302.2	49.6	43.1	24.4	20.3	606.4	73.3	90.5	100.2	43.0
い	-	-	1.3	-	-	-	4.1	-	-	-
この	-	1.1	-	-	-	-	8.2	-	-	-
なんか	1.4	-	3.8	22.9	7.4	-	-	28.0	44.2	23.8
こう	-	-	-	1.5	-	-	-	-	11.8	13.7

表7を見ると、まず、学年が進むに伴い使用頻度が顕著に減少する形式として、母音型のフィルター「あ」が挙げられる。具体的に、依頼場面では1年次の775.8から4年次の129.7へ、断り場面では1年次の1323.2から4年次の173.9へと、両場面で一貫して大幅な使用頻度の減少傾向が見られた。同様に、フィルター「ん」も、特に依頼場面で1年次の302.2から4年次の24.4へと大きく使用頻度が低下している。これらの形式は、最初の学年において思考や発話プランニングの時間を保つという基礎的なものとして機能していると考えられるが、学習経験の蓄積に伴い、より日本語的なフィルター形式や談話ストラテジーと関わる形式へと移行していく様子が見えてくる。

また、学年が上がるとともに使用頻度が増加する形式も観察された。その代表として、「あの」と「えっと」が挙げられる。フィルター「あの」は、依頼場面では1年次の27.2から2年次には209.3へと急増し、4年次(109.8)まで高い使用頻度を維持している。断り場面でも同様に、1年次の89.9から2年次には334.0へと増加し、4年次でも200.41と高い頻度を維持している。「えっと」も依頼・断りの両場面で、1年次では低い頻度ながら、2年次以降に急増し、3年次と4年次にでも高い頻度で使用されるようになった。しかし、これらのフィルターの使用頻度が最大値に達する学年は、依頼・断り場面によって異なっている。このことは、日本語学習者が各場面のコ

コミュニケーション上の負荷を受けながら、その場面に応じたストラテジーを発達させていく、複雑な成長過程を示唆している。

加えて、特定のフィラー形式の出現パターンが、日本語学習者の日本語運用能力の発達段階を反映する可能性も考えられる。例えば、フィラー「こう」は、依頼・断り両場面ともに4年次に初めて見られた。フィラー「こう」について、山内(2009)は、OPI(会話能力を測定するテスト)のレベル別分析において、「あの」「まあ」「なんか」「その」「こう」といった語は超級レベルの話者に多く出現すると指摘している。4年次に上がった日本語学習者において「こう」が新たに出現したということは、彼らがより高い日本語会話レベルに到達しつつあることを示す一つの指標と言えよう。

日本語母語話者と比べると、日本語学習者特有の使用傾向と、学年が上がるにつれて日本語母語話者への接近が観察された。例えば、日本語学習の初期段階におけるフィラー「あ」や「ん」の極端な使用は、日本語母語話者(表7)のパターンとは大きく異なっている。一方、日本語母語話者が比較的高い頻度で使用するフィラー「あの」(依頼199.7,断り150.8)や「えっと」(依頼66.6)、「まあ」(依頼85.0,断り51.2)といった形式は、日本語学習者も学年の上昇につれて使用頻度が増加する傾向にあり、これは日本語母語話者の使用実態への接近過程と捉えることができる。また、フィラー「まあ」のように、日本語母語話者では高い頻度で使われていても、日本語学習者においては高学年に上がっても日本語母語話者ほど水準には達していない形式も存在し(日本語学習者:依頼4年次27.5,断り4年次35.4)、形式ごとのフィラーの発達過程には差異があることが示唆される。

また、フィラーの使用形式の多様性については、日本語学習者は1年次では、高い頻度で使用したフィラー形式が「あ」「ん」「う」「うん」「え」といった比較的単純な母音型に集中しているのに対し、学年が上がるにつれて、「あの」「えっと」「その」「なんか」「こう」といった多様な形式がより安定して使用できるようになる。これは日本語学習者が運用可能なフィラーのバリエーションが拡大し、発話状況に応じてより多様な形式を使用する能力が発達していることを示唆している。

最後に、場面間の差異については、フィラーの全体使用頻度で見た傾向と同様に、形式面でも「断り」場面特有の使用が存在する可能性があると言える。日本語学習者の場合、フィラー「え」と「うん」は、断り場面でより高い頻度となる傾向は見られた。日本語母語話者の使用を見ると、フィラー「ん」と「なんか」は断り場面で、「はい」や「まあ」は依頼場面で比較的に多く使われている。このような違いは、各場面がそれぞれ持っているコミュニケーションの要求がフィラー形式の選択に影響を及ぼしている可能性を示唆している。

#### 4.3.2 主要形式の構成と推移

前節では全てのフィラー形式の使用実態を概観したが、より中核的な使用傾向を把握するため、本節では各学年・場面で特に使用頻度の高かった主要なフィラー(上位5形式)に焦点を当て、その構成と推移を詳細に分析する(表8,図4参照)。

表 8 各フィルター形式の学年・場面別の使用頻度 (1万語あたり)

	1年次		2年次		3年次		4年次		母語話者	
	フィルター形式	頻度	フィルター形式	頻度	フィルター形式	頻度	フィルター形式	頻度	フィルター形式	頻度
依頼	あ	775.8	あ	484.5	あ	357.1	あ	129.7	あの	199.7
	ん	302.2	あの	209.3	あの	211.5	えっと	117.5	あ	134.0
	う	83.0	うん	116.5	う	125.4	あの	109.8	まあ	85.0
	うん	77.6	えっと	99.3	その	84.9	う	50.3	えっと	66.6
	え	50.4	う	97.1	えっと	62.1	その	41.2	え	62.9
断り	あ	1323.2	あ	680.2	あ	396.4	あの	200.4	あの	150.8
	ん	606.4	あの	334.0	あの	241.3	あ	173.9	あ	140.7
	う	187.5	うん	281.1	う	226.2	えっと	109.1	まあ	51.2
	うん	146.5	えっと	246.4	え	153.0	ん	100.2	え	49.4
	え	136.2	え	203.7	その	153.0	うん	76.6	ん	43.0

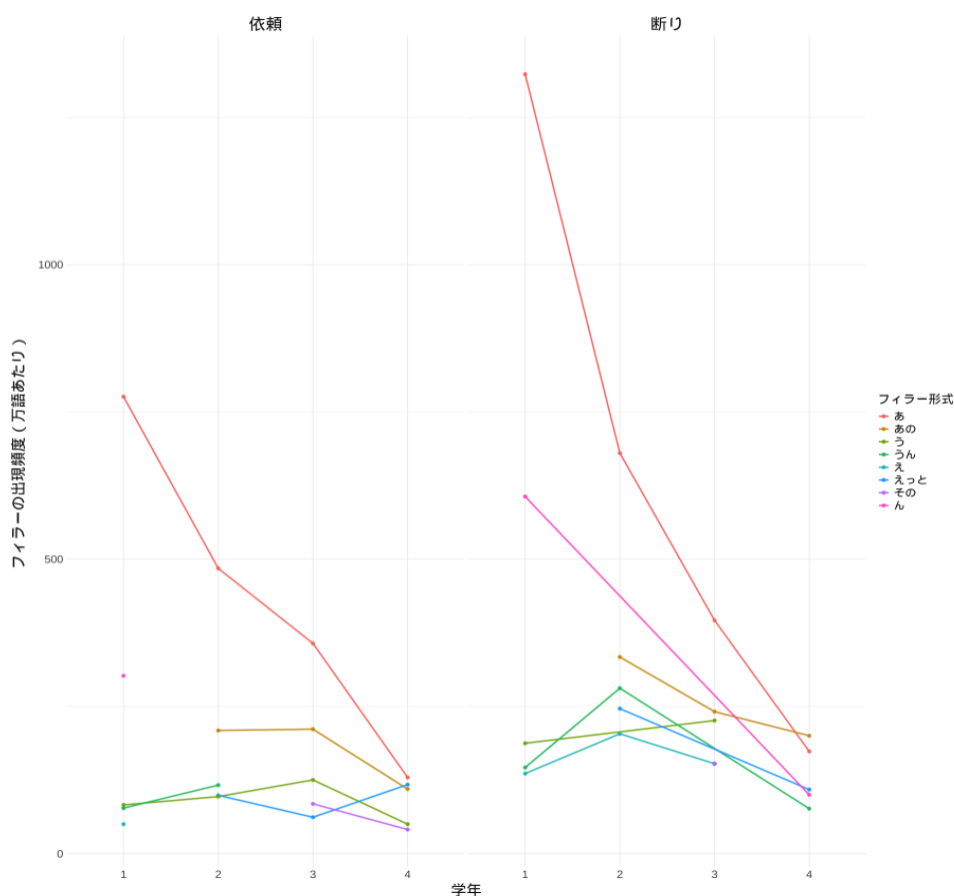


図 4 学年・場面別の日本語学習者の上位 5 位フィルター形式の使用頻度の推移

日本語学習者の場合、依頼場面においては、まず母音型フィラー「あ」が1年次に圧倒的な使用頻度を示し、その後は学年次の上昇に伴って大きく減少したものの、4年次においても依然として使用頻度第1位の形式であった。これに続くのが「あの」と「えっと」で、いずれも1年次には上位に見られなかったが、2年次以降に使用が急増し、4年次にはそれぞれ第3位と第2位に定着した。一方、「ん」や「う」などの母音型フィラーは、1年次には上位5位以内に入っていたものの、年次の上昇に伴って順位を下げ、上位から脱落していく傾向が確認された。

次に、断り場面において、母音型フィラー「あ」は1年次の1323.2から4年次の173.9へと大幅に減少するものの、4年次においても依然として第2の位置を維持していた。一方、最終的に第1位となったのは指示詞型フィラー「あの」で、1年次から継続して使用頻度が増加していた。また、フィラー「えっと」も同様に増加傾向を示し、4年次には第3位に定着した。

ここで注目すべきなのは、フィラー「ん」と「うん」の動きである。フィラー「ん」は、1年次に第2位であったが、2年次には一度急減し、その後再び頻度が戻り、4年次には第4位に再び入るといった特徴的な推移を示した。また、「うん」も4年次において第5位に留まり、上位使用形式として存在感を保った。

こうしたフィラーの構成変化は、日本語学習者のフィラー使用が、初期段階における単純な母音型への依存から、より談話ストラテジー的な機能を担う指示詞型フィラー（「あの」や「えっと」）へと重点を移行していく発達の過程を反映していると考えられる。

さらに、日本語母語話者の使用傾向と比較すると、日本語学習者の高年次における主要フィラーの構成は、日本語母語話者の使用パターンに部分的に収束していく様子が観察された。特に4年次になると、日本語学習者も日本語母語話者と同様に、「あの」「あ」「えっと」の3形式を最頻出フィラーとして共有するようになる。しかし一方で、日本語母語話者において主要なフィラーである「まあ」が学習者には定着していない点や、断り場面における「うん」の多用など、日本語学習者特有の使用傾向も依然として残っている。

以上の分析結果から明らかになるのは、日本語学習者が使用する中核的なフィラー形式が、学年の上昇に伴って質的变化を遂げ、部分的には母語話者の使用実態に近づいていく一方で、場面の影響や特定形式の学習状況に応じて、独自の軌跡を描くという複雑な発達パターンである。これはすなわち、日本語学習者のフィラー使用の発達が、単なる「日本語母語話者化」のプロセスではなく、日本語学習者自身による言語運用能力の発展と、それに伴うコミュニケーション・ストラテジーの構築過程として捉えるべきであることを示唆している。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、日本語学習者のフィラー使用の傾向を、学年が進むことによる変化と、依頼・断りという場面を軸に、頻度と形式の2側面から分析を行い、日本語母語話者との比較を通じて、その発達の特徴を多角的に考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) フィラーの全体的な使用頻度は、学年が進むにつれて、依頼・断りの両場面において減少する傾向が見られた。ただし、その減少のパターンは場面によって異なり、特に断り場面でもより顕

著であった。また、場面間の比較では、全学年を通じて一貫して断り場面の方が高い使用頻度を示していた。

(2) 日本語母語話者との比較により、日本語学習者のフィラー使用の発達が単純な日本語母語話者への接近過程とは異なる様相を示すことが、二元配置分散分析によって実証された。具体的には、4年次において、日本語学習者のフィラー使用頻度は依頼場面では日本語母語話者の水準にほぼ到達していたのに対し、断り場面では4年次においてもなお有意に多くフィラーを使用する傾向が継続していた。さらに、日本語母語話者においては場面間で使用頻度に顕著な差が見られなかった一方、日本語学習者においては断り場面でもより多くフィラーを使用する傾向が認められ、こうした非対称的な発達パターンは、日本語学習者特有のものであることが示された。

(3) フィラーの形式面では、学年が進むにつれて「あ」や「ん」などの母音型フィラーが減少し、一方で「あの」や「えっと」などの形式が増加・定着していく傾向が確認された。これらの形式の使用頻度のピーク時期はフィラーの種類や場面によって異なっており、フィラーの発達が一方的な変化ではなく、形式ごとの役割に応じた段階的な発展を遂げている可能性が示唆された。上位5形式の構成においても、学年が上がるにつれて日本語母語話者と共通する形式（「あの」「え」「えっと」など）が中心となる一方、「まあ」の使用が安定して見られない点や、断り場面での「うん」の多用など、日本語学習者特有の使用傾向も依然として存在していた。

総じて、日本語学習者のフィラー運用の洗練は、単純な「日本語母語話者化」として一括りにできるものではなく、学習の段階や使用されるフィラーの形式、さらには依頼・断りといった場面特性に応じて多様に変化しながら、日本語学習者自身が自らの言語運用ストラテジーを構築・発展させていくプロセスであることが明らかになった。

一方で、本研究にはいくつかの限界が存在しており、今後の課題として以下の点が挙げられる。

(1) 本研究の分析対象は、中国の特定の大学に在籍する17名の中国語を母語とする日本語学習者に限定されており、彼らのフィラー使用の発達過程が、他の教育環境や異なる母語背景を持つ学習者にも妥当に一般化できるかどうかについては、今後の検証が必要である。

(2) 本稿の分析は、フィラーの「頻度」および「形式」といった量的側面に焦点を当てたものであり、使用実態全体を包括的に捉えるには至っていないという限界がある。すなわち、日本語学習者がフィラーを「何を」「どの程度」使用するかという点については明らかとなったものの、「どのように」「何と共に」使用されるのかといった語用論的側面には、十分に踏み込むことができていない。たとえば、「あの」や「まあ」といったフィラーが談話内のどの位置で用いられ、どのような品詞や表現、あるいは特定の発話行為と結びつきやすいのかを明らかにする分析が、今後は求められるであろう。こうした共起環境に関する質的・量的分析を通じて、フィラーの使用傾向が時間の経過とともにどのように変化するのかを縦断的に把握することが、今後の重要な課題の一つであると考えられる。

## 参考文献

石黒圭 (2022) 「日本語学習者のフィラーの習得と評価—中国語を母語とする日本語学習者3名を



- 対象にしたケーススタディー」『言語コミュニケーションの多様性』123-143. くろしお出版  
 呉楚琦 (2024) 「日本語学習者の独話におけるフィラーの使用傾向-縦断学習者コーパスを用いて-」『一橋大学国際教育交流センター紀要』6:57-69
- 小西円 (2018) 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』(15): 91-105
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6(3): 93-110
- 佐藤淳子 (2025) 「学習者が日本語母語話者の非流暢性に見る「母語話者らしさ」とその運用意向」『日本語・国際教育研究紀要』28:38-55
- Chen Zuohao (2025) 「コーパスに見られる中国人日本語学習者のフィラーの習得」『グローバル人文学研究交流会要旨集』1:30-33
- 趙丹楠 (2024) 「中国人日本語学習者の依頼表現における語用論的転移：意味公式に基づくロールプレーデータの分析から」『国語学研究』26:19-27
- 萩原孝恵・池谷清美 (2023) 「I-JAS にみるフィラーの比較：ベトナム人学習者，タイ人学習者，日本語母語話者の場合」『山梨国際研究：山梨県立大学国際政策学部紀要』18:53-66
- 眞鍋雅子 (2013) 「ポライトネスの視点から見た中上級日本語学習者の発話：依頼と断りの発話行為より」『言語科学研究：神田外語大学大学院紀要』19:77-100
- 水本篤・竹内理 (2011) 「効果量と検定力分析入門：統計的検定を正しく使うために」2010年度部会報告論集『より良い外国語教育のための方法』:47-73
- 山内博之 (2009) 『プロフィシェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 山根智恵 (2002) 『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
- 李在鎬・小林典子・今井新悟 (2015) 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」『第二言語としての日本語の習得研究 / 第二言語習得研究会 編』18:53-69
- Gries Stefan Th.& Dagmar Divjak (Eds.) (2012) *Volume 1 Frequency Effects in Language Learning and Processing*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Meunier, Fanny (2015) Developmental patterns in learner corpora. In : S. Granger, G. Gilquin & F. Meunier (Eds.), *The Cambridge handbook of learner corpus research*,379-400. Cambridge. University Press

## 関連 Web サイト

- 国立国語研究所『北京日本語学習者縦断コーパス :B-JAS』  
<https://www2.ninjal.ac.jp/jll/bjas/bjasindex.html> (2025年2月20日最終閲覧)
- 国立国語研究所『多言語母語の日本語学習者横断コーパス:I-JAS』 <https://lsaj-data.ninjal.ac.jp/my/>  
 (2025年2月25日最終閲覧)

# **The Development of Filler Use in Japanese Learners' Role-Plays: A Longitudinal Corpus-based Analysis of Request and Refusal Scenes with a Native-speaker Comparison**

WU CHUQI

Hitotsubashi University / Project Collaborator, NINJAL

## **Abstract**

This study investigates the developmental trajectory of filler use by Chinese learners of Japanese. Drawing on a longitudinal learner corpus (B-JAS), it quantitatively examines how their use of fillers evolves over four years in pragmatically and cognitively demanding role-play tasks (requests and refusals), and compares their performance with that of native Japanese speakers using I-JAS data.

The analysis yielded two key findings. First, while the frequency of filler use decreased across academic years in both task types, the rate of decline varied: a steeper reduction was observed in the more cognitively demanding refusal scenes. By the fourth year, learners' filler frequency in request scenes approached native-speaker levels, whereas a significant disparity remained in refusal scenes. Second, the forms of fillers shifted over time from simple vowel-type fillers prevalent in early stages to more lexicalized forms such as *ano* and *etto*, indicating a partial convergence toward native-speaker usage.

These findings suggest that the development of filler use among L2 learners is not a linear process of approximating native speaker norms, but rather a dynamic, learner-driven process in which strategies are adapted in response to the specific cognitive and pragmatic demands of each communicative task.

**Keywords:** fillers, longitudinal study, Japanese language learners, role-play, scene comparison